『比較日本文化学研究』第10号（2017）

論　文

『白痴』における「堕落」

李　慧

河北北方学院講師・広島大学大学院文学研究科博士課程後期

The Discourse on Decadence in "The Idiot"

LI Hui

Abstract: After Japan's defeat in World War II, Japanese people faced a series of consequences. These included extreme deprivation of material resources, the deaths of countless people, the destruction of cultural assets, the US occupation, moral collapse, and many survivors did not know how to go on. In this extreme situation, people lost the confidence to continue to survive, and became immersed in endless anguish and despair. Ango Sakaguchi published "Discourse on Decadence" (April 1946) and "The Idiot" (June 1946) in succession to prevent people from falling into decadent sentiments. The two works are thought to echo each other. This essay analyzes the relationship between the two works, and discusses the significance of "decadence" in "The Idiot".
Keywords: Ango Sakaguchi, "Discourse on Decadence", "The Idiots", Postwar Japan

はじめに

日本における敗戦の派生物である物資の窮乏、無数の人間の死、文化遺産の崩壊、米軍による占領、モラルへの懐疑、天皇の「人間宣言」などが次々と生起する極限状況の中で、生き残った人々は「どこかの場所に何か希望があるのだろうか」「何をたよりに生きるのだろう」（『白痴』（1946.06））、と生きていく自信がなくなり、苦悶、絶望に陥りかけるところであった。エッセイ『堕落論』（1946.04）はまさにその大空襲による大混乱、頽廃のただ中における坂口安吾の、それを防ぐための叫びである。「敗戦の表情はただの堕落にすぎない」「堕落という真実の母胎によって始めて人間が誕生したのだ」（『堕落論』）と叫びながら、安吾が『堕落論』を書き、『白痴』を創作したのである。

従来、『白痴』の同時代評では、平野謙は小説の「明日の希望」で終わるところを批判している。十返肇は伊沢と「白痴の女」が新しい生活をしようとしていないから失敗作であると批判している。後年になると、作品は再評価され、素晴らしい作品であると評するようになった。後年の作品論は、戦時下の人間認識、戦時下の極限状態における人間追放を通じての人間出発、作品に表れた坂口安吾の戦争に対する認識、エッセイ『堕落論』と小説『白痴』との関係、などを論じている。

短編小説『白痴』は1946年6月『新潮』に発表され、『堕落論』(1946.04)の小説版として注目された。花田俊典は、『白痴』には堕落の姿を描かれていないので、『白痴』を『堕落論』の小説化と呼べない、と評している。しかし果たしてそうであろうか。本論文は、『白痴』における「堕落」を中心に、『白痴』と『堕落論』を両輪的作品と捉えられるかどうかを明らかにすることを目的とする。

『白痴』は1945年3月10日と4月15日の東京大空襲を背景に展開され、安吾なりに戦時下の世相を書き記している。作品の主人公の伊沢は理智のあるエリートで社会に強く絶望していた。一方、「白痴の女」はその呼び名どおりの「白痴」で、言葉も常識も持たず、赤裸々な姿のまま生きることしかできない女性である。伊沢と「白痴の女」とは、「エリート」と「白痴」の代表で、両極的な存在である。しかし、作品の最後は、伊沢が「白痴の女」を連れて「停車場」へ向かい、生きて行こうとした。伊沢と「白痴の女」の間には、何があったのか、なぜ伊沢が「白痴の女」と一緒に生きて行こうとしたのか。原因は、戦争下伊沢が「白痴の女」に「再生へのきっかけ」を発見し、「明日の希望」を探し出したからである。本論文は、伊沢が「白痴の女」と出会うことによっていかに心象変化をしたのか、という順番を分析していく。

1　伊沢の二つの世界

伊沢は、二つの世界に住んでいる。一つは、秩序の全然ない下宿したところ、もう一つは、「低俗」な会社である。

まず、小説の冒頭から展開されている伊沢が下宿した付近の「生態」は濃密で動物的な空気が溢れている。「人間と豚と犬と鶏と家鴨」が区別なくともに住んでいる建物、「相手の分らぬ子供を孕んでいる」「走る格好が家鴨に似

ている」娘、肺病の豚にも贅沢すぎない小屋、七八人の情夫を追い出して中年の男を物色する55歳の婆さん、夫婦の関係を結んでいる兄妹、その関係に満足する母親、猫イラズで死んだのに平気で心臓麻痺の診断書を書いた町医者、「鳥類的」な声を持つ「気違い」の母親、総動員体制を積極的に利用して利益を取ろうとする「海軍少尉」「女子挺身隊」、など常人が考えられない淪落の風景である。ここに住んでいる人たちは、名前さえ与えられず、動物と区別がなく、倫理・モラルから逸脱した連中である。伊沢はこの動物と人間の差異がほとんどつかない路地に住んでいて、この路地は戦争のためにそうなったわけではなく、先からずっとそうだったと路地の住民たちに教えられていた。大学を出て映画会社に就職している伊沢は矜持を多少持っている知識人であり、路地の人に「先生」と呼ばれ、路地の無倫理状態を理解できず、疎外された人間でもある。

安吾はエッセイ『詐欺の性格』(1948.01) の中で「私も中世を好まない。中世よりも古代、原人の倫理を好み、中世に復帰するなら古代に、まず原人に復帰したいと考える。カミシモをぬぐなら、カミシモだけぬいで中世にとどまるよりも、フンドシまでぬいで原人まで戻ろうというのが私の愛する方法だ」[1] と書いている。安吾は、千年かけて作り上げられた社会が二三年間の戦争で潰され、もとに逆戻りした、と思っていた。安吾が伊沢を動物性が漂い、倫理の喪失した環境に住ませたのは、どうせ戻るなら原人まで戻ろう、そこから人間として出発すればいい、という考えからである。

一方、伊沢が勤めている映画会社は彼のもう一つの世界である。時局に迎合することだけを信念とする「賤業中の賤業」である。映画作り自体は「賤業」ではないが、称賛される芸術品になる可能性もあるが、現に戦争にしか合わない映画会社は、伊沢にとって「芸術」になるような作品が作れない「賤業中の賤業」である。伊沢は「自我」「個性」「独創」などを追求するが、会社の人々は正反対に、「ああ日の丸の感激だの、兵隊さんよ有難う」のような時代に乗り遅れない企画しか作らず、「芸術は無力だ」と宣伝し、軍部の検閲を才能の貧困の救済とする。集団的な発狂としか言えない状況の中で、「芸術の独創」を信じる伊沢は異物とされる。戦争と芸術性の貧困について議論しに社長室に乗り込んだが、世間並みの仕事に精をだすだけで月給がもらえる、月給がほしいなら余計なことは考えるな、と言われてしまう。伊沢は、「情熱は死んでいる」と言い、「芸術家」としての「存在」理由を忘れている。しか

し、「二百円の給料」のために伊沢は仕事をやめることはできなかった。食べていくために給料が必要で、「自我」を忘れて仕事を続けずにはいられない。

路地の「生態」は、猥雑で淫らな性的関係を中心としている。会社は、戦争に合う映画しか作らず、架空な文章しか書かないような凡庸さを擁護する人たちで満ちている。一見全然違うような世界であるが、戦時体制を利用して今日一日の食物のために生きる頽廃的な人々の集合体であるところには変わりがない。路地の、女たちは戦時の特別な環境を利用して妾になったり、売淫したりして金銭をもらう。軍人少尉が自分の地位を利用して、戦時でもコーヒー、酒を飲める。満州浪人は人殺しまで商売にして生活していく。会社には、毎月の給料のために、「個性」「自我」を諦め、軍部の検閲を才能の貧困の救済とし、退屈無限の映画を作っている。昼の職場の低俗卑劣から逃げようとしたら、淫乱の住居地に帰るしかない。乱れた住居地から逃げようとしたら、職場に戻るしかない。二つの世界にいながらも二つの世界ともになじめず除けものとされる。総動員時代において、日本全体が戦時体制に置かれている以上、この組み合わせの世界は伊沢にとって逃げようとしても逃れられない嫌悪する世界であり、伊沢の生活の「全体」でもある。伊沢にもたらされたものは退屈、空虚、孤独だけであった。伊沢の生活全体は「二百円の給料」という「卑小の問題」に限定されている。その「二百円の給料」の根底には「理智」に支配されている人間社会が存在している。伊沢がその「二百円の給料」の問題を「卑小」と見下ろしながら執着せざるを得ない理由はそこにある。エリートであるからこそもっと社会の掟を守らなければならないその偽善さは、伊沢が無限の退屈、極まりない嫌悪を感じた原因である。そのような環境から脱出するには、環境自体の崩壊しか頼るものがない。環境自体が崩壊するには大いなる空襲しか頼れない。伊沢は希望を見ることができずにその空襲の到来を待ち構えている。

2 「ふるさと」の発見

空襲ですべてが破壊される前に「白痴の女」は伊沢の元に侵入してきた。侵入する前の伊沢の目に届いた「白痴の女」は美貌をもっているが、言葉を持たず、「何かおどおどと口の中で言うだけで、その言葉が良くききとれず」。普通の人のように話すことができず、他の人も彼女の話を理解できない。

「白痴の女」の侵入によって伊沢の世界が変わっていく。「白痴の女」は伊

沢を「絶望」から「希望」に導くガイドと言える。最初に「白痴の女」に対する伊沢の印象は同情的であった。しかし、「言葉を持たない」ということは「白痴の女」における意味が大きい。言葉は人間のコミュニケーション手段として重要な役割を果たしている。言葉を持たないということは通常の人間関係を築く能力を持たないということである。このことからは、「白痴の女」が人間社会あるいは世間への認識がないこと、また、世間外部の人間であること、さらに、伊沢を含むすべての他人から排除されたこと、という結論を導くことができる。

しかし、「白痴の女」は侵入してきた。

> ある晩、おそくなり、ようやく終電にとりつくことのできた伊沢は、すでに私線がなかったので、相当の夜道を歩いて我家へ戻ってきた。あかりをつけると奇妙に万年床の姿が見えず、留守中誰かが掃除をしたということも、誰かが這入ったことすらも例がないので訝りながら押入をあけると、積み重ねた蒲団の横に白痴の女がかくれていた。[2]　（『白痴』）

「白痴の女」は「伊沢の愛情を目算に入れて」伊沢の家に侵入し、伊沢に嫌われたと思って悲しみ、泣く。伊沢は「白痴の女」から「素直さ」「無心さ」を見出す。「白痴の女」は素直すぎる一方、伊沢は偽善の「膜」を剥ぎ取らずにいる。時局便乗的な職場に溶け込めず、「二百円の給料」のために凡庸さと低俗さに苛まれ、自分を含めての日本人に絶望した伊沢は、「白痴の女」の「生」「素直さ」「無心さ」に感動する。

> 女の髪の毛をなでていると、慟哭したい思いがこみあげ、さだまる影すらもないこの捉えがたい小さな愛情が自分の一生の宿命であるような、その宿命の髪の毛を無心になでているような切ない思いになるのであった。[3]（『白痴』）

なぜ、伊沢がこのような世間外れの人間である「白痴の女」から「自分の一生の宿命」を感じて感動したのか。それは、「白痴の女」の素直さから自分が欠けているものに気付き、自分が人間の本性から遊離していることに気づいたからである。伊沢の世界は、生きていくためには言葉を用いてコミュニケーションし、理屈する。働いて金を稼いで生活する。時々、自分の「性」を利用して金になる取引をする。そして、社会の基盤として「掟」というものもあり、エリートである伊沢はそれを守ることを義務とする。夫を持つ女

と肉体関係を持たないという社会の常識に基づき、伊沢は「白痴の女」を「保護」しようとする。しかし、「白痴の女」は、言葉を用いず、理屈することができない。モラルの観念がなく、「食べていく」という概念もなく、自分の「性」を「食べていく」ために使うのではなく、自分の肉欲のためだけに使い、「本能」のままに生きている。すなわち、すべての方面において、「白痴の女」は言葉も、体も生活のための道具になっていない、社会の偽善の「掟」に拘束された「世間」と無縁の、「純粋」というしかない「新鮮」な存在である。世間に絶望し、そこからの脱却を図りつつあるが結局できなかった伊沢は、自分が長い間求めている終極的な世界を「白痴の女」から見出した。「白痴の女」の実質は、まさに「新鮮な再生」である。その「新鮮な再生」は、「世間」から逸脱した理想郷であり、「本能」に生きる世界である。努力すら許されない環境に明日の希望が見えなく、生きることに「絶望」した伊沢には、「白痴の女」の好意から「小さな愛情」が生じ、死んだ情熱が復活した。つまり、生きることへの、生活への憧れが再び蘇られた。

> 伊沢の前に白痴の意志や感受性や、ともかく人間以外のものが強要されているだけだった。[4]　（『白痴』　下線引用者）

> なまじいに人間らしい分別が、なぜ必要であろうか。白痴の心の素直さを彼自身も亦もつことが人間の恥辱であろうか。俺にもこの白痴のような心、幼い、そして素直な心が何より必要だったのだ。俺はそれをどこかへ忘れ、ただあくせくした人間共の思考の中でうすぎたなく汚れ、虚妄の影を追い、ひどく疲れていただけだ。[5]　（『白痴』　下線引用者）

> 人間の最後の住みかはふるさとで、あなたはいわば常にそのふるさとの住人のようなものなのだから[6]　（『白痴』　下傍線引用者）

「人間」には「社会」の要素が含まれている。伊沢が「人間」を繰り返して強調したことから、彼は「白痴の女」との比較を通じて自分の中に「社会」の低俗なルールが染みすぎていることを発見した、ことが窺える。「白痴の女」は「ふるさとの住人」と伊沢には思われる。

「ふるさと」という言葉は安吾の愛用語で、彼の作品によく出てくる言葉の一つである。安吾はエッセイ『文学のふるさと』（1941.07）の中に「凡そモラルというものが有って始めて成立つような童話の中に、全然モラルのない作品が存在する」と書いている。そして、それを証明するために三つの物語

を上げている。童話「赤頭巾」の可愛い少女がお婆さんに化けた狼に食べられてしまった。「狂言」の一例、大名が寺詣に行き、屋根の鬼瓦が女房に似ると思って泣き出した。また、『伊勢物語』の中の一例、三年間口説いてやっと思いがかなった男が女を連れて駆け落ちするところ、女は鬼に食べられてしまった。確かに安吾が書いているように、三つの話には、モラル、背徳というものが全然なく、教訓というようなものもない。安吾がまたこういう、

> モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というようなものは、この「ふるさと」の上に立たなければならないものだと思うものです。[7]　（『文学のふるさと』）

可愛い娘、愛する女が食べられたらそれだけの話であり、救いようがなく、慰めようもない。安吾はモラルのない文学を肯定し、モラルのないこと自体がモラルであると主張している。

> 生存の孤独とか、我々のふるさとというものは、このようにむごたらしく、救いのないものでありましょうか。私は、いかにも、そのように、むごたらしく、救いのないものだと思います。（中略）モラルがないということ自体がモラルであると同じように、救いがないということ自体が救いであります。
>
> 私は文学のふるさと、或いは人間のふるさとを、ここに見ます。[8]
> （『文学のふるさと』）

安吾は、「モラルがない」ということに「ふるさと」を見出している。つまり、安吾が言う「ふるさと」とは、人間の原始のままの、道徳、背徳の観念が一切ない、純朴・素朴のこと、である。

『白痴』において、伊沢は「白痴の女」のことを「ふるさとの住人」と言ったが、伊沢にとって「白痴の女」は、「社会」の気配がないこと、人間本性のままのこと、純朴のこと、を指すであろう。前述したように「白痴の女」は自分で生きる手段も言葉も持たなく、安蒜氏の言葉を借りれば、「＜白痴の女＞の肉体は、手段化されない肉体であり、そこには直接的な生がある。従って伊沢もまた、＜白痴の女＞と共に過ごす部屋の中に、直接的な生を感じ、それは、伊沢が求めていた＜世間＞からの逸脱と結びついている。ここに伊沢の＜白痴の女＞との連帯感が生まれる」[9]ということになる。「手段化されない肉体」というのはやはり、生きるために工夫する観念を持たなく、肉体を

利用して、食べていくための工夫しないことである。「白痴の女」の素直さは人間本性からのものである。倫理的虚飾のもとで人間の本性から遠ざかる伊沢が「白痴の女」に「新鮮な再生」を感じたのは、自分の中に眠っていた人間本性のものが目覚め始めたから、と考えることができる。

> 白痴の女よりもあのアパートの淫売婦が、そしてどこかの貴婦人がより人間的だという何か本質的な掟が在るのだろうか。けれどもまるでその掟が厳として存在している馬鹿馬鹿しい有様なのであった。[10]
> (『白痴』 下線引用者)

ここの「本質的な掟」は「ふるさと」と真逆な意味を持っている。前述のように「ふるさと」はモラルがないことを指すなら、「本質的な掟」は人間社会の道徳、法律、秩序を指す。ここでの意味は簡単に言えばおそらく生き残るための手段であろう。「人間」として生きるために、「人間社会」が成り立つために、「本質的な掟」が必要である。伊沢はそれを「馬鹿馬鹿しい」と言い、つまり「人間社会」の掟の否定である。売淫婦と貴婦人たちも社会に生きるために差異なく工夫し、様々な手段を使う。しかし、「白痴の女」にはそのような気配は一切ない。それは「白痴の女」とほかの人との本質的な違いである。

安吾は「人間本性」のままに生きる「白痴の女」を称賛し、「本質的な掟」に従って生きる売淫婦と貴婦人らを否定するのは、安吾にとって「人間本性」の姿こそ人間の正しい姿だからなのである。「人間の、又人性の正しい姿とは何ぞや。欲するところを素直に欲し、厭な物を厭だと言う、用はただそれだけのことだ」(『続堕落論』1946.12)。人間は生きるために、方便のために、たくさんの社会制度、政治制度などという「掟」を作り出した。天皇制も、武士道も、「節婦は二夫に見えず」という制度もすべては権謀術数のために政治家たちによって作られたが、作ること自体は人間は一連の制度に従って行動するのが本性ではないことを証拠づける。

天皇制も武士道もすべては、政治家たちの威厳を示し、権力を操る手段として作られた。天皇自身は命令を知らないうちに天皇名義の命令が下された。武士は、戦前に「天皇のために死ぬ」と言って戦場に向かったが、生き残って帰ってくる人は闇屋となったり、犯罪を犯した。未亡人は、泣いて夫を戦場に送ったが、半年後また恋人を作ったりした。人間には欲望がある。闇屋となった帰還戦士は、犯罪を犯す欲望がある。新しい恋人を作った未亡人も

肉欲がある。それが、彼らの本来の姿で、本来の人性である。しかし、人間が作り上げた制度は、人間の本来の欲望を抑え、非人間的、反人性的なものである。安吾は、人間の本性をねじ曲げた「掟」を強く批判した。そういった「掟」によって「人間の、人性の、正しい姿を失った」（エッセイ『続堕落論』1946.12）のである。「今日の社会の秩序には、多くの不合理があり、蒙昧があり、正しい向上をはばむものがあるのではないか」（エッセイ『戦争論』（1948.10））と言った。

そして、安吾は人間が正しい姿に戻るために大声で叫ぶ。

> 大義名分だの、不義は御法度だの、義理人情というニセの着物をぬぎさり、赤裸々な心になろう、この赤裸々な姿を突きとめ見つめることが先ず人間の復活の第一の条件だ。そこから自分と、そして人性の、真実の誕生と、その発足が始められる。[11]　（『続堕落論』）

安吾の理論では、人間の赤裸々な姿に、つまり人間本来の姿に戻る手段は「堕落」である。安吾の以上の心情はまた伊沢の心情である。伊沢にとって、「白痴の女」こそ自分の理想の赤裸々な姿の女である。そして、親近感を持った以上、伊沢は肉体行為をしない理由を白痴に説明しようとしたが、言葉を持たない「白痴の女」に分かってもらえない。「実態はともかく彼が白痴と同格に成り下る以外に法がない」ということによって、伊沢は自分も知らずうちに「白痴の女」と同様に「堕落」する可能性を自分の内に発見した。つまり、これから伊沢は「言葉」ではなく、「白痴の女」がコミュニケーション手段とする「肉体」で彼女と交流しようとする。「白痴の女」から「新鮮な再生」を見出すこと、人間本来の姿から遊離することに気づくこと、自覚せずに白痴と同格に成り下がろうとすること、それは、伊沢の「再生」への第一歩である。

「伊沢は女が欲しかった。女が欲しいという声が伊沢の最大の希望ですらあった」。ずっと「二百円の給料」に苦しめられ、情熱を失い、絶望していた伊沢は、このとき初めて「情熱」が復帰した。「二百円の給料」は社会的な問題であり、「女が欲しい」というのは人間本性、あるいは本能の問題である。しかし、その「最大の希望」もやはり「二百円の給料」に縛り付けられ、「卑小の問題」によって不可能にした。もし、一緒に生活して子供まで生まれたら、三人の食べ物を確保するために伊沢は、「世間」の中で工夫しなければならない、今まで以上に退屈した会社に無理して馴染まなければならない。伊沢が

追求していた「自我」「独創」などを徹底的に放棄することを意味するかもしれない。それは伊沢が求めている生活と正反対である。伊沢がそのようなことを許すことはできない。「白痴の女」によって人間本性に接近しつつも、「白痴の女」の生き生きとした「生」を肯定しつつも、伊沢が「二百円の給料」から脱出することはできない。願望と現実との間の不均衡によって、伊沢には強い不満、憤慨が生じる。もともと自分を取り巻く生活環境に対する絶望の上に、それに加えて伊沢はすべてを壊す意欲が強くなっていった。伊沢は、空襲を期待していた。

> 破壊の神の腕の中で彼は眠りこけたくなり、そして彼は警報がなるとむしろ生き生きしてゲートルをまくのであった。生命の不安と遊ぶことだけが毎日の生きがいだった。警報が解除になるとガッカリして、絶望的な感情の喪失が又はじまるのであった。[12] (『白痴』)

伊沢は世間から排除された「白痴の女」に理想の姿、すなわち「ふるさと」を発見した。伊沢は、この「新鮮な再生」に感動しながら自分の無力さ、卑小さを感じる。と同時に戦争の偉大な破壊を見出していた。

3 絶望へ

上述のように、二人が同棲生活するようになってからの物語は、伊沢が「白痴の女」に死んでほしい、「白痴」を殺したい、というように語られた。

> 俺は落着いている。そして、空襲を待っている。(中略) 戦争がたぶん女を殺すだろう。その戦争の冷酷な手を女の頭上へ向けるためのちょっとした手掛りだけをつかめばいいのだ。俺は知らない。多分、何かある瞬間が、それを自然に解決しているにすぎないだろう。そして伊沢は空襲をきわめて冷静に待ち構えていた。[13] (『白痴』)

伊沢が「白痴の女」の死を期待していたのは、「白痴の女」から伊沢は「ふるさと」を発見し、「白痴の女」の素直さに感動したが、「白痴の女」自体は伊沢に希望を与えたわけではなかったからである。

> けれどもそれは一つの家に女の肉体がふえたということの外には別でもなければ変ってすらもいなかった。それはまるで嘘のような空々しさで、たしかに彼の身辺に、そして彼の精神に、新たな芽生えの唯一本の穂先すら見出すことができないのだ。その出来事の異常さをともかく理性的に納得しているというだけで、生活自体に机の置き場所が変ったほどの変化も起

きてはいなかった。[14]　　(『白痴』)

それはなぜであろう。

伊沢は昼間仕事に行く時白痴のことを思いだせない。普通の人間なら、どれほど年齢が小さく、どれほど無知だとしても伊沢の気にかからないはずがないが、白痴だけは人間の気配はなく、家の中の「家具」と変わらないぐらいの存在である。ただ、「白痴の女」は「家具」と違うところが一箇所だけあり、すなわち肉欲があることである。「白痴の女」は、伊沢に肉体の一部が触れられたときだけ反応があり、肉体行為だけを貪りたがり、他のすべてのときは無意識に眠っている「家具」にすぎない、一切の感情がない純粋な「肉欲」のみと化した存在である。

女の意識する全部のことは肉体の行為であり、そして身体も、そして顔も、ただ待ちもうけているのみであった。(中略) 目覚めた時も魂はねむり、ねむった時もその肉体は目覚めている。在るものはただ無自覚な肉慾のみ。それはあらゆる時間に目覚め、虫の如き倦まざる反応の蠢動を起す肉体であるにすぎない。[15]　　(『白痴』)

物語はこの純粋の「肉体」からさらに展開していく。平常時、「白痴の女」は「肉体」としてとどまることができるが、爆撃の時は恐怖のため「肉体」だけのままではいられない。同棲してからの生活、平常時、「白痴の女」は「肉欲」のみと化した存在になり、肉体行為だけを待ち設けていた。それは、魂はいつも昏睡し、肉体はいつも目覚めている、虫のように反応する肉体である。奥山は、「「魂のない肉体」、即ち、言語のない身体は、アダムとイヴの堕落以前の楽園を故郷としている。そこでは、善も悪も命名しがたいものとして昏迷の中にある。「虫の如き倦まざる反応の蠢動を起す肉体」には、姦通の罪意識が本来無い」[16] と述べている。爆撃のとき、爆発の恐怖で「白痴の女」は言葉も呼吸も思念もとまり、肉欲も消え、抑制も抵抗もなく、発狂寸前状態になり、理智のない「苦悶」だけが顔に残っている。伊沢の目に映ったその「苦悶」は、「それはただ本能的な死への恐怖と死への苦悶があるだけで、それは人間のものではなく、虫のものですらもなく、醜悪な一つの動きがあるのみだった」[17]。伊沢は「あさましい」と「醜悪」しか感じられない。なぜ伊沢は「醜悪」と感じたのか。

安吾はエッセイ『幽霊と文学』(1936.11) の中で、幽霊の性格をこう書いている。

幽霊は悪魔とちがつて、徹頭徹尾凄味あるのみ、甘さやユーモアは微塵もない。ひとつには人間の本能にひそむ死への恐怖が幽霊と必然的に結びついているためもあるが、又ひとつには「死んで恨みを晴らさう」という笑いの要素の微塵もない素朴な思想が、幽霊の本質的な性格を規定しているためである。[18] (『幽霊と文学』)

まとめてみれば、幽霊は、人間の本能に潜む死への恐怖と結びついている素朴なものである、と言える。そして、安吾は、「私は幽霊がきらいである。徹底的にきらいだ。憎んでもいる。」[19] また、「私はかような素朴な恐怖におびえる自分がたいへん厭だ」[20] と幽霊を否定している。安吾が幽霊を否定するということは、人間の本能に潜む死への恐怖という素朴なものを否定するということになる。安吾自身が素朴な恐怖におびえる自分が嫌いである。安吾が嫌いだと感じた恐怖はただの恐怖ではなく、幽霊の性格の一つとしての恐怖、つまり、人間の本能に潜む死への恐怖である。

伊沢が「醜悪」と感じたのは、おそらく人間の本能に潜む素朴な死への恐怖におびえることへの嫌悪からのものであろう。つまり、伊沢が感じた「醜悪」は本能と切れない関係がある。

ああ人間には理智がある。如何なる時にも尚いくらかの抑制や抵抗は影をとどめているものだ。その影ほどの理智も抑制も抵抗もないということが、これほどあさましいものだとは！女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りついていた。苦悶は動き苦悶はもがき、そして苦悶が一滴の涙を落している。もし犬の眼が涙を流すなら犬が笑うと同様に醜怪きわまるものであろう。影すらも理智のない涙とは、これほども醜悪なものだとは！[21] (『白痴』)

「人間には理智がある」、というのは人間には物事を思考する能力、判断する能力があるという意味である。爆撃の時、白痴が常人以上の怖さを流露したが、その怖さは空襲に対する思考を行ったあとの怖さではなく、ただ「本能的」な、肉体を失うことだけに対する露骨な恐怖である。空襲に対する理解などは一切なく、「肉体」自体が涙を落とし、動き、もがき、「肉体」自身が苦悶する。この恐怖は、「本能に潜む死への恐怖である」。一方、伊沢の恐怖は、世間の掟に従順しながら多少「抑制」したあとの「人間」の恐怖である。二種類の恐怖の間には絶対的な違いがある。すなわち「本能的」な恐怖と「理智的」な恐怖との違いである。「人間ではないもの」の恐怖と「人間」

の恐怖との違いである。この二種類の絶対に通じない恐怖の深層には、生き物としての「性質」の問題が含まれている。人間の体を持ちながらも「異質」であり、絶対に越えられない壁が真ん中に立っていて、両側を絶対の孤独に置かざるを得ない。

> 言葉も叫びも呻きもなく、表情もなかった。伊沢の存在すらも意識してはいなかった。人間ならばかほどの孤独が有り得る筈はない。男と女とただ二人押入にいて、その一方の存在を忘れ果てるということが、人の場合に有り得べき筈はない。人は絶対の孤独というが他の存在を自覚してのみ絶対の孤独も有り得るので、かほどまで盲目的な、無自覚な、絶対の孤独が有り得ようか。それは芋虫の孤独であり、その絶対の孤独の相のあさましさ。心の影の片鱗もない苦悶の相の見るに堪えぬ醜悪さ。[22]　（『白痴』）

二人が一つの押入にいながら、伊沢が「白痴の女」に意識されることはない。伊沢は完全な「孤独」に陥った。恐怖のあまり、白痴は肉欲まで失い、従って「肉体」の意味すらも失ってしまう。伊沢が「白痴の女」から感じた「新鮮な再生」は、伊沢の愛情を目算に入れて肉体関係を求めに侵入した彼女の素直さ、純朴さ、純粋さからのものである。つまり、「白痴の女」が性的に生き、素直に肉体関係を求めることから伊沢は「純粋」を見つけ、「新鮮な再生」を感じた。彼女の「肉欲」は、伊沢に「純粋」、さらに「新鮮な再生」を感じさせた鍵とでも言える。しかしここまで来て、「白痴の女」は、伊沢に肉体を触れられても何の反応もなくなり、すでに肉欲が消えた。肉欲が消えたということは、伊沢に「純粋」「新鮮な再生」を感じさせる媒体がなくなる、ということでもある。それは、伊沢は「白痴の女」にふたたび「新鮮の再生」を感じさせることはなくなることを意味する。かわりに、伊沢に「絶望」を感じさせる。言い換えれば、「白痴の女」には存在意義がなくなり、伊沢に「絶対の孤独」を残す以外に、何の意味もなくなってしまう。伊沢が「筈はない」と二回繰り返して自分の驚き、失望を強調しながら、「新鮮な再生」から感じた「小さな愛情」がふたたび「絶望」に変わってしまう。それは、伊沢が「醜悪」と感じた真相である。

せっかく「白痴の女」から「ふるさと」を発見し、感動したが、恐ろしい空襲が来たとき、その「ふるさと」は消え、伊沢は再び「絶望」に陥る。すべてを終結させる方法として、伊沢は壮大な空襲を待つのである。

4 「堕落」と「希望」の間

伊沢は「世間」からの逸脱を望みつつも、「二百円の給料」という食べていく資金を得るために、「世間」の中で生きなければならない、「世間の掟」を守らなければならない。「二百円の給料」は「世間」の中でしか得られないからである。伊沢が生活に絶望して毎日空襲を期待していたのに、「白痴の女」と同棲生活をしてから警報が鳴るたびに「彼は非常に不愉快な精神状態になるのであった」。伊沢が「期待」から「不愉快」になるのは、「白痴の女」との同棲がばれることを心配しているからである。そして、4 月 15 日の空襲はあまりにも恐ろしかった。視野に入るものはほとんど火の海で、「気違い」の家と伊沢の家を含めて路地が全焼した。伊沢はもう 3 月 10 日のように見物することはできず、恐怖に襲われ、「身体自体が本能的に」動くようになり始めた。4 月 15 日の空襲のとき、伊沢が仕立て屋夫婦に逃げるようと促されたとき逃げなかった。その最大の原因も「白痴の女」にある。

> 早く、早く。一瞬間が全てを手遅れに。全てとは、それは伊沢自身の命のことだ。早く早く、それは仕立屋をせきたてる声ではなくて、彼自身が一瞬も早く逃げたい為の声だった。彼がこの場所を逃げだすためには、あたりの人々がみんな立去った後でなければならないのだ。さもなければ、白痴の姿を見られてしまう。[23] （『白痴』）

伊沢は「白痴の女」が自分のところにいるのを見られてしまうこと、つまり世間にばれることを恐れている。乱れた性関係を前提とする路地の人々は、そのようなことを全然気にしていなくて、人妻の「白痴の女」との不倫関係を心配することはないはずで、伊沢はこれを承知しているのに、「白痴の女」を隠そうとしている。それこそ伊沢が世間の掟、モラルに固執している証拠である。伊沢は「白痴の女」が自分のところにきたことから「新鮮な再生」を感じてきたにもかかわらず、強く世間に執着している。伊沢が世間に執着したのは、生きるためにやむを得ないことである。そのやむを得ないことから伊沢はまた辛さを感じる。しかし、自分がそれを裁く力さえないから、「破壊」を期待する。

その「破壊」が来たとき、すべての人が路地から撤退したあと、伊沢はただ「白痴の女」の死を見届けるだけで自分の願望が叶うはずなのに、「白痴の女」をそのまま放置せず連れて逃げた。なぜ、伊沢がそのような行動をしたのか。伊沢は「理智」のもとに「白痴の女」を救出したわけではなく、むし

ろこのときこそ「本能」によって行動したのである。壮大なる空襲がもたらした絶大な「恐怖」は、「白痴の女」だけを「本能」に導いたのではなく、伊沢をも「本能」に導いたのである。伊沢が「白痴の女」を押入から救出する前に、以下の不思議なことが起こった。

> 変てこな静寂の厚みと、気の違いそうな孤独の厚みがとっぷり四周をつつんでいる。もう三十秒、もう十秒だけ待とう。なぜ、そして誰が命令しているのだか、どうしてそれに従わねばならないのだか、伊沢は気違いになりそうだった。突然、もだえ、泣き喚いて盲目的に走りだしそうだった。[24]
> (『白痴』)

この「誰が命令している」の「誰」は、伊沢の「本能」そのものである。「本能」とは何であろう。安吾はエッセイ『我が人生観』(1950.5-1951.1)の中で以下のようにを書いている。

> 私は自分の病気中の経験から判断して、人間は(私は、と云う必要はないように思う)最も激しい孤独感に襲われたとき、最も好色になることを知った。(中略)
> 最後のギリギリのところで、孤独感と好色が、ただ二つだけ残されて、めざましく併存するということは、人間の孤独感というものが、人間を嫌うことからこずに、人間を愛することから由来していることを語ってくれているように思う。人間を愛すな、といったって、そうはいかない。どの人間かも分らない。たぶん、そうではなくて、ただ人間というものを愛し、そこから離れることのできないのが人間なのではあるまいか。[25]
> (『我が人生観』)

安吾の考えでは、「最後のギリギリのところで」は孤独感と好色だけが残る。孤独感は人間を愛することに由来するが、好色とはどういうものだろう。安吾はエッセイ『我が人生観』の中で下山事件[26]の下山総裁の例を上げて「孤独」と「好色」について解釈している。下山総裁が死ぬ前に、以前親しかった人々に逃げられていた。しかし、たった一人の娘だけが彼から逃げなかった。彼は孤独を恐れ、孤独になればなるほど彼女に会いたくなった。

> この娘のところへ一目会いに行こうと思うのは、彼の精神状態の場合には、甚しく自然である。何かに、すがりたい。何か、親しいものに会いたいのだ。彼が何より怖れているのは孤独なのである。[27]　(『我が人生観』)

下山総裁はこの娘との間に肉体関係はないが、

どんなにプラトニックでも、男女のことは、底に肉慾的な願望が必ず潜在しているものだと断定してよろしいだろう。
（中略）
彼が彼女に一目会いたいと思いたった時には、ただ一目会いたいと思う程度であったが、やがて彼の意志の全部は、彼女との肉慾の遂行に塗りかえられていたのではないかと思われる。[28]　（『我が人生観』）

と安吾は言っている。これが安吾の「最も激しい孤独感に襲われたとき、最も好色になる」ということの意味である。安吾の考えに従えば、「好色」は「孤独」と深く関わっている。「孤独」は人間を愛することから由来するので、「好色」も人間を愛することから由来することになる。安吾がいう「孤独」と「好色」は、肉欲のことではなく、その深層に「愛」が含まれている。つまり、「最後のギリギリのところ」、あるいは人間の原始の衝動に「愛」の要素が内在する。その「原始の衝動」は「本能」とも言える。言い方を変えれば、「本能」の行動の根底には「愛」が含まれている。

「白痴の女」に忘れさられ、激しい爆撃に直面したとき、伊沢は、「最後のギリギリのところ」に置かされ、人間を愛するという「本能」に触発された。「本能」に触発された伊沢は、「理智」というものを忘れ果て、「気違いになりそうだった」「盲目的に走りだし」て救出に行ったのである。

押入の戸をはねとばして（実際それは外れて飛んでバタバタと倒れた）白痴の女を抱くように蒲団をかぶって走りでた。それから一分間ぐらいのことが全然夢中で分らなかった。路地の出口に近づいたとき、又、音響が頭上めがけて落ちてきた。[29]　（『白痴』）

ずっと「理智」に支配され、「本能」を「醜悪」と名付ける伊沢はようやく「本能」によって行動した。伊沢の中にはじめて「本能」が「理智」に勝ったとも言える。伊沢がやがて「肉体自体の思考」を経験した。その一分間は本能によるショックで伊沢は意識を失い、失神状態になり、あるいは「仮死」状態になったと言ってもいい。「仮死」になった伊沢にとって「蘇生」するために「再生」の道を探さなければならない。よって、これから伊沢は「蘇生」のために積極的で大胆に「再生」の道を探すことになる。

逃げるとき、二人は「十字路」を発見した。その「十字路」は単なる道の分かれ目ではなく、伊沢にとっては人生の「十字路」、つまり、ターニングポイントの象徴でもある。伊沢は、積極的に「再生」の可能性を探し、「運を試

す」。伊沢がわざわざ「群集の流れに決別した」方向を選んだのは特別な理由があった。「群集の方向」は人々と合体することで空襲の前の社会に戻ることを象徴するので、「再生」の道ではない。よって、伊沢は、火の海に近い方向、すなわち「群集の流れに決別した」方向を選んで「俺の運をためす」のである。伊沢は、「群集の流れる方」に引き返した「白痴の女」に「そっちへ行けば死ぬだけなのだ」[30] と言った。そのときの方向は群集の方向であるゆえ、その「死ぬ」は、伊沢と「白痴の女」の「再生」が「死ぬ」という意味合いである。そして、自分の選んだ方向を示す時、

> 死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をただまっすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね。[31]　（『白痴』 下線引用者）

と言った。ここでの「死ぬ」は、世間から死んで「再生」する意味合い、あるいは「運」が悪くて爆撃で肉体も完全に死ぬことの意味合いである。「再生」を求め、自分なりの方法で試すことは、伊沢の「再生」への第二歩と言える。

そして、伊沢の選んだ道に対し、白痴は「ごくんと頷いた」。白痴が初めての意志に対して伊沢は「感動のために狂いそうになる」。ここで現れた白痴の意志は決して「理智」の意志ではなく、むしろ極端の恐怖の状況において「肉体自体」が思考しはじめ、「肉体自体の思考」による意志と言ったほうが適切である。しかし、「そのあまりに大仰な「感動」のゆえんは、もはやくどく説くまでもなかろう、「人間には理智がある」はずだという、あの伊沢の精神の世界が、もとのままの平衡を一瞬にしてとり戻したからである」。[32] つまり、理智のない人間は人間ではないと思って絶望した伊沢は、「白痴の女」の「肉体自体の思考」によって、「人間」を確認し、絶望した気持ちが希望に変った。「今こそ人間を抱きしめており」、ここでの「人間」は、もはや理智のある、社会の制度、道徳、法律を守る「人間」ではなく、むしろ一切束縛されない「原人」であり、伊沢が白痴の「本能」に支配されている「意志」から認識した「新人間」である。この「新人間」の発見こそが伊沢が感動して狂いそうになる真の原因である。極度の恐怖の中に、「理智」が「本能」に勝てないこと、「新人間」がこれほど喜ばしいこと、伊沢はこれに気づくことによってようやく「本能」を認めざるを得なくなる。そして、水に浸した「白痴

の女」に「一人の新鮮の女が生まれでた」と伊沢が「むさぼり見た」。ここは、女が生まれ変わったわけではなく、伊沢の認識に重大の変容が起きただけである。「白痴の女」から「新鮮な再生」を見出したのと、「醜悪」と決めつけたのとは、全部伊沢個人の勝手な思い込みであった。しかし、極度の恐怖の場において、伊沢自身も「本能」に戻されるとき、伊沢が「白痴の女」への「降参」を認めた。換言すれば、「理智」は「本能」に降参したということでもある。

二人が逃げる途中、「人間が二人死んでいた」と伊沢は発見した。その死んだ二人は伊沢と白痴の「死」の象徴である。換言すれば、伊沢は「新人間」の発見によって、人間の「殻」から蛻け、認識上で古い思想が「死ぬ」、「世間」の掟を捨てた象徴と言える。

また、逃げ続ける途中、意外なことに、伊沢と「白痴の女」はふたたび決別したはずの人々たちに出会った。そして伊沢は、

> 伊沢はむしろ得体の知れない大きな疲れと、涯しれぬ虚無とのためにただ放心がひろがる様を見るのみだった。その底に小さな安堵があるのだが、それは変にケチくさい、馬鹿げたものに思われた。何もかも馬鹿馬鹿しくなっていた。[33]　（『白痴』）

という状態になった。「馬鹿馬鹿しくなっていた」のは、伊沢がなぜ決別したはずの群集にまた合流したかに対してだけではなく、自分の「再生」を探す道に遠回りすることに対するものである。また、「肉体自体の思考」への無言の承認でもある。一番「醜悪」であると思っているものを自分が認めざるを得ないときの伊沢の、無力さ、徒労感でもある。「再生」はただ社会のルールをすべて捨てるだけなのに、伊沢は社会から外れた者の代表である「白痴の女」を認めず、見下し、殺そうとしていた。

前述したように、路地の人たちは倫理を知らず、動物的な仲を作っている。「動物的」というのは、「人間社会」と対立して、人間社会の「掟」に影響されず、あるいは受ける影響が少なく、赤裸々の姿にごく近い状態である。「白痴の女」は、その集団の中で一番特別な存在である。特別というのは、彼女は誰より原始のままの人間、つまり安吾が言っている「原人」である。伊沢は、最初は路地を否定し、路地から逃げようとしたが、今不意に群衆と合流した。その運命的な出会いは、伊沢が動物的世界に回帰したことの象徴である。伊沢は、戦争の恐ろしい経験によってやがて倫理を完全に否定し、「動物

性」を認め、動物的世界に生きようとする。そのこと自体は、伊沢の「堕落」の象徴である。

作品の最後で伊沢は「白痴の女」を豚と思わなくなった。「伊沢が、もはや思考を放棄したというのである。「白痴の女」が「豚そのもの」だと知らされたからだけではない。むしろ、そう名づけて理解しようとする精神の営為自体の徒労なることを、したたか一方で感じはじめているからにほかならない」。[34] 伊沢はすでに何もできなくなり、何もしなくなり、自然に任せてそのままにしておいた。伊沢が「大きな疲れ」を感じたのは、「世間」から抜け出す過程の苦労さ、どうしようもないことが分かってすべてを諦めたときの疲れである。「小さな安堵」は、伊沢がもう何もしなくてもいい、このまま堕ちるままに任せればいいと分かったときの安心である。

このようにして「白痴の女」に対する伊沢の考えが少しずつ変わってきた。すなわち、感動する→嫌悪して殺そうとする→「白痴の女」のように堕ちて彼女とともに生きて行こうとする、という感情の変化を伊沢は経験した。その「心変わり」こそが伊沢の「堕落」である。伊沢が感じた「安堵」は、「堕落」に対する心からの承認と言える。

伊沢が「白痴の女」を捨てる張り合いもなくなり、そして、「崩れたコンクリートの蔭で、女が一人の男に押えつけられ、男は女をねじ倒して、肉体の行為に耽りながら、男は女の尻の肉をむしりとって食べている」、ここでは、伊沢が女の尻の肉を食べることによって、「白痴の女」と同等の豚に成り下がっている。認めたくなくても認めざるをえなかった人間の「本能」あるいは「肉体自体の思考」の完全の受け入れ、またその実行でもある。すべてを失ってすべてに捨てられたあとの伊沢ができることは、まず堕ちることである。堕ちることによって「昇ろう」としている。作品の結びは、

> 夜が白んできたら、女を起して焼跡の方には見向きもせず、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場をめざして歩きだすことにしようと伊沢は考えていた。電車や汽車は動くだろうか。停車場の周囲の枕木の垣根にもたれて休んでいるとき、今朝は果して空が晴れて、俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうかと伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであった。[35]　（『白痴』）

伊沢はこの時初めて本格的に「本能」を受け入れた。すべてがなくなり、伊沢は「白痴の女」のように、人間として一番基本の「ねぐら」、「眠り」の

問題に直面している。「世間」とか文化とか道徳とかは一切重要ではなく、一番重要なのは人間として一番基本的で、始源の問題である。そして、終着点と出発点の象徴である「停車場」を目指す。「裸となり、ともかく人間となって出発し直す必要がある」(エッセイ『続堕落論』(1946.12))。ここの「人間」は、伊沢の言っていた「ふるさとの住人」であると言える。言い換えれば、道徳の制服を脱いだあと、モラル・法律・基準など文化の虚偽性が一切ない、純粋きわまる原始のままの人間である。伊沢は今裸になり、新たに出発する可能性があった。それは、伊沢がふたたび生きていく意志の証拠である。

終わりに

戦争下の極限状態で絶望に陥っていた伊沢が二転三転最後は自分の「エリート」の着物を剥ぎ取り、自分のもっとも見下した「白痴の女」と同格になることを意図して「下降」する。磯貝英夫は『私小説の克服』という論文に、安吾作品の一つの特徴として、登場人物および作品全体はまず「下降」し、「下降」した後はまた「上昇」する傾向がある、と指摘している。いわゆる「下降」による「上昇」、「下降」あってこその「上昇」である。伊沢は「堕落」したが、「上昇」のため、すなわち「明日の希望」のための「堕落」である。この意味で『堕落論』の主旨と一致している。『白痴』は『堕落論』の小説化と言える。

注

[1] 坂口安吾『坂口安吾全集 15』、東京：筑摩書房、1996 年 6 月 30 日、255 頁。
[2] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、p16 頁。
[3] 同著、20 頁。
[4] 同著、19 頁。
[5] 同著、19–20 頁。
[6] 同著、20 頁。
[7] 坂口安吾『坂口安吾全集 14』、東京：筑摩書房、1998 年 10 月 5 日、328 頁。
[8] 同著、330 頁。
[9] 安蒜貴子「坂口安吾「白痴」論」、『国文白百合』、38 号（2007 年 3 月）、41 頁。
[10] 坂口安吾「白痴」『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、23 頁。
[11] 坂口安吾『坂口安吾全集 14』、東京：筑摩書房、1998 年 10 月 5 日、589 頁。
[12] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、22 頁。

[13] 同著、29-30 頁。

[14] 同著、24 頁。

[15] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房　1999 年 10 月 15 日、26 頁。

[16] 奥山文幸「坂口安吾「白痴」論――聴覚空間のアレゴリー劇」、『近代文学研究』第 8 号（1991 年 5 月 20 日）、22 頁。

[17] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、28 頁。

[18] 坂口安吾『坂口安吾全集 14』、東京：筑摩書房、1998 年 10 月 5 日、223 頁。

[19] 同著、223 頁。

[20] 同著、224 頁。

[21] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、27-28 頁。

[22] 同著、28 頁。

[23] 同著、33 頁。

[24] 同著、34 頁。

[25] 坂口安吾『坂口安吾全集 15』、東京：筑摩書房、1996 年 6 月 30 日、615 頁。

[26] 下山事件とは、1949 年 7 月 5 日朝、国鉄総裁下山定則が出勤途中に失踪、翌 7 月 6 日未明に死体となって発見された事件である。

[27] 坂口安吾『坂口安吾全集 15』、東京：筑摩書房、1996 年 6 月 30 日、610 頁。

[28] 同著、612 頁。

[29] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、34 頁。

[30] 同著、36 頁。

[31] 同著、36 頁。

[32] 花田俊典「白痴」評釈　久保田芳太郎、矢島道弘『坂口安吾研究講座　2』　三弥井書店、1985 年、53 頁。

[33] 坂口安吾「白痴」『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、37 頁。

[34] 花田俊典「白痴」評釈　久保田芳太郎、矢島道弘編『坂口安吾研究講座　2』、三弥井書店、1985 年、54 頁。

[35] 坂口安吾『坂口安吾全集 4』、東京：筑摩書房、1999 年 10 月 15 日、40 頁。

参考資料

図書

1. 関井光男『坂口安吾研究』、東京：冬樹社、1973 年。
2. 前田角蔵『文学の中の他者―共存の深みへ』、東京：菁柿堂、1998 年 9 月。
3. 久保田芳太郎、矢島道弘『坂口安吾研究講座　2』、東京：三弥井書店、1985 年。

雑誌論文

1. 浅子逸男「白痴」『日本文学』、28 巻 7 号（1979 年 7 月）、72-78 頁。
2. 安蒜貴子「坂口安吾「白痴」論」、『国文白百合』、38 号（2007 年 3 月）、41-50 頁。
3. 石月麻由子「身体表現から再考する坂口安吾「白痴」 ―肉体と精神の＜聯絡＞というし視座に立って―」、『国文学研究』、139 巻（2003 年 3 月）121-132 頁。
4. 磯貝英夫「私小説の克服―昭和文学の一系流をめぐって」、『文学』、28 巻上（1960 年 2 月）、1-10 頁。
5. 奥山文幸「坂口安吾「白痴」論――聴覚空間のアレゴリー劇」、『近代文学研究』、第 8 号（1991 年 5 月 20 日）、13-27 頁。
6. 菊地薫「安吾の＜戦争＞ －坂口安吾「白痴」論－」、『早稲田大学教育学部学術研究』、48 号（1999 年）、97-109 頁。
7. 水上勲『白痴』論、『国文学：解釈と鑑賞（坂口安吾の世界＜特集＞；作品の世界）』、58 巻 2 号（1993 年 2 月）、108-111 頁。